

表したい思い＝「こだわり」に応じて、自然に造形の見方(要素, 原理)を働かせる

小橋教諭の「12歳の私をみつめて」では、「自分とは…?」「自分にとっての色・形って…?」と、この時期の6年生ならではの思い(こだわり)を持って、探究に没頭する子供の姿が見られた。「象徴」(概念(②造形の原理)の「置換」に基づくものか?国語科の文学的な見方とも重なる)を取り上げることで、子供が願いを実現する手立てとなっていた。協議を通して、材(自画像や象徴的図画, コラージュ)によって、働かせる見方(①造形の要素②造形の原理)は異なるのかということが話題に挙げられた。子供の思いによって働かせる見方が異なること、それを選択して自在に働かせることで自分のものになっていくことが明らかになった。さらに、図工科においては、これらの見方が学年を追うごとに深まっていく捉えではなく、自分の「やりたい!」に応じて、時に複合的に働くことで、より豊かになっていく捉えであることも語られた。小橋教諭としては、本時間における子供の姿に個人差があったことや、考えや表現したいことを共有して学びを深めていく姿を求めていることも明かされたが、それは、今後「構成」を探っていく段階で見られそうだ。

相手を知ろうとする思いが、共通性・独自性・多様性を見方を働かせる

外国語活動4学年「This is my favorite place」では、堀井教諭が共通性や独自性、多様性の概念を働かせることで、相手に合った表現を再構築する姿を目指されました。研究協議では、本時における「外国語活動ならではの何か」が議論の中心でした。子供たちが、相手の事をより知ろうとコミュニケーションを図ることで、「何とか伝わった!」「面白い!」と、やりとりの価値を実感する事が、「外国語ならではの」と意見が集約されていきました。そのためには、ペアでの対話の場面で表現(伝え方)にこだわるだけでなく、理由(内容)を伝えることで、自然なコミュニケーションが生み出されます。例えば、自分のお気に入りの場所を紹介する際に、「I like library.」で終わるのではなく、「なぜ好きなのか」「何をするのか」などを伝えたり、聞き手が既習を生かして「Do you like〜?」と尋ねたりします。そうすることで、何とか伝えようと「外国語ならではの」学びの姿が表出されます。外国語活動は、教科書で押さえる用語に限定することで、思考が窮屈になることがあります。だからこそ、「日本語でもいいから思いを伝えてごらん」と伝えたり、「〇〇って英語で何と言うの?」と尋ねたりすることで、自然なコミュニケーションの中で、相手の多様性を理解することができます。教科提案では、その多様性を理解するために共通性・独自性・多様性を見方が挙げられています。「外国語ならではの」の視点で概念を見つめ直すと、「言語的独自性」「文化的独自性」など細分化して系統立てることで、より重点が明確になり、概念が洗練されていく新たな可能性も見えた実践となりました。

